

研究覚え書き

数年前、会社供養塔の調査をするために高野山をはじめとおとすれた。会社供養塔のおおくは奥之院の参道や大霊園のメイン・ストリートに面してたち、アポロ十一号などの奇抜なデザインに目をうばわれた。

その後、何度か高野山に足をはこび、およそ九十の会社供養塔が存在することを確認した。いくつかの会社の物故者供養も写真やビデオにおさめることができた。

最初の調査の印象では、あたらしい会社供養塔と苦むした大名の五輪塔のとりあわせがとりわけ鮮明だった。ふと「むかし大名、いま社長」という文句が頭をよぎった。

社会学には産業社会学、都市社会学などの分野があり、経営学でも日本の経営が脚光をあびている。しかし日本の藩や会社の実態にそくして理論化をはかる社会学や経営学はどれほど発達しているのだろうか。日本の人類学においては都市人類

むかし大名、いま社長

中牧弘允

学や経済人類学が市民権をえているが、会社をフールドとする研究は極端にすくない。ただし梅棹忠夫氏の大企業Ⅱ藩モデル論や米山俊直氏の社縁の概念のように、先駆的な考察がないわけではない。

藩社会はとくに消滅し、武士階級も雲散霧消した。世の中は階級社会から大衆社会に変貌した。しかし藩社会は会社のなかに復活し、武士階級はサラリーマンに姿をかえたとみることはいできないだろうか。

藩と会社、大名と社長のとりあわせは一見唐突にみえるかもしれない。だが戦国時代や徳川初期の大河ドラマに人気があるのは、ひとつには武士団（藩）や大名が会社や社長とダブるよう演出されていいるからではないだろうか。

会社供養塔は、経営者の意向にそって、高度成長の時代に増加した。「同墓共同体」のこれからゆくえにも目を光らせていきたい。

（なかまきひろちか・国立民族学博物館助教授・宗教学人類学）